
真冬の夜の薄桜鬼

彩月絢芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真冬の夜の薄桜鬼

【Nコード】

N5461BA

【作者名】

彩月絢芽

【あらすじ】

新入生歓迎会で演劇「真夏の夜の夢」をすることになった薄桜学園の生徒たち。ヒロイン千鶴の相手役を巡って配役から揉めてしまいが、果たして・・・？沖齋設定ではあるのですが基本薄めでコメディ全開にできたらと思います。おつきあいよろしくお願いします

プロローグ（前書き）

以前活動報告に書いた「真夏の夜の夢」ネタが、なんとなくまとまってきたので開始します。
思いついたら書いていきます。

プロローグ

「ねー、一体何なのさ、この集まりは。僕これから用事があるんだけど」

三学期の始まった薄桜学園^{はくおう}。逆向きにした椅子に腰掛けた二年生の沖田総司^{おきたそうじ}は、口を尖らせて明らかに不満げだった。理由はただ一つ、放課後に呼び止められて、教室に残されているからだ。

「待て総司。雪村の緊急提案なのだ」

「す、すみません沖田先輩、もう一人……が来たら始めますので」

同級生齋藤一^{さいとうはつめ}が総司を宥めに入ると、唯一女子学生である一年生の雪村千鶴^{ゆきむらちづる}も申し訳なさそうに頭を下げる。

「今日は始業式だけだから頑張つて早く来たのに。もう眠いよ」

総司は辺りを憚らず大欠伸を漏らす。その横で風紀委員長でもある一がやや顔を顰めた。

「当たり前だ、始業式でなくても遅刻してはダメに決まっている」
「でもさ、みんな昼飯もまだだし、早く話しよーぜ、千鶴」

同じく一年生の藤堂平助^{とうどうへいすけ}が立ち上がる。同じく席についている他の1年生、千鶴の従兄・南雲薫^{なぐもかおる}と山崎丞^{やまざきすけ}も苦い面持ちだ。始業式の日には学食が閉まっつていて、購買部のパンも早くしないと売り切れしてしまうのだ。

すると、廊下から甲高い靴音が近づいて来るのが聞こえた。足音は教室で止まり、入ってきたのは生徒会長・風間千景^{かざまちかげ}たちだった。

千景は戸口に立っていた千鶴と、教室内の総司たちを見回した。

「ふん、我が妻のたつての頼みで来てみたが、この者たちは一体何だ」

「それはこつちの台詞だね。千鶴ちゃんが待つてたのってこいつらなワケ？ 僕たちを待たせていいと思つてんの」

「重役が最後に来るのは当然の習いだらう、副会長沖田」

「招かれざる客つて気が大いにするんだけどね」

睨み合つた総司と千景の間に火花が走る。千景の後ろにいた会計あまぎりの天霧が止めに入ろうとしたその間を縫つて、千鶴がそそくさと教壇の前に立った。書記の不知火しごひしはにやにやしながら事の成り行きを見守っている。黒板にはいつの間にか山崎が文字列を書き始めていた。

「なになに・・・新入生歓迎会？」

平助が怪訝な声を漏らした。途端に総司と千景も黒板に向き直る。

「・・・どういうことだ？ 雪村。来年度の入学式はまだ先のことだが」

一が気を取り直して質問する。

「はい。だからこそ、今のうちに始めたいと思つたんです。新入生歓迎会のために、有志による演劇をやってみたらと思つて。ほら、うちの学校はまだ男女共学になつたばかりですし、生徒全体の交流になると思つんです」千鶴が頬を紅潮させながら早口に答える。「・・・でしようか」

千景が着席しながら訊いた。

「しかし一体どうして今頃なのだ？ 文化祭もあったではないか」
「気がついたらもう冬になってて、文化祭ネタは書けなかったんです！」

「雪村くん、何の話をしているんだ」

「全く計画性がないよねー」

山崎がつっこみ、薫が誰ともなく言い放った。はい、すみません。

「ていうかなんで演劇なの？ 千鶴、中学で演劇部とかだったっけ」

「平助くん・・・それはね・・・」

彼らは千鶴の次の言葉を待った。

「それは・・・単にやってみたいんです！」

「そ、それだけかよ！！」

「だって、ここ演劇部なかったし・・・それに、やってみたい劇があるんです」

「もう決まってるのか」

一同が呆気に取られた。総司はまだむっつりとしている。千景は少し興味を持ったようだ。

「で、何の劇がやってみたいのだ？ お前がヒロインで俺がヒーローならば、何も反対することはせん」

「はい、やってみたいのはコメディなんです。演劇っていうとやっぱりシークスピアかなと思ったんですけど、その中でもストーリーがわかりやすく面白いものと思って、これです」

千鶴が出して見せたのは『真夏の夜の夢』だった。

「真夏の夜の夢、ね……。入学式は春だけど？」薫がまた嘲笑混じりに呟く。「しかも、登場人物の男女比は1対1。うちには女子が1人しかいないってのに、一体どうするのさ」

「そこなんですけど、」千鶴は軽く息を吸って吐き出した。「男女逆転にしたら、もっと面白くなるんじゃないかって。で、私はパツクがやってみたいんです」

「はあ?!」

その場に居た千鶴以外が頓狂な声を上げた。

「パツクというのはヒロインなのか？ 我が妻よ」

「いいえ、ヒロインというよりは妖精役です」

「では俺は何の役をやればいいのか」

「……一番強い役とかはどうでしょう?」

「それで、妖精とやらと愛し合う役なのだな」

「いえ、その……」

「僕、パス」

席を立ったのは総司だった。「別に演劇なんて僕やりたくないし。やりたい人が勝手にやったらいいよ」

「沖田先輩……!」

明らかにショックを受けている千鶴を残して、総司は教室を出ようとした。ところが、

「なるほど、素晴らしいじゃないか!」

快活に笑いながら入って来たのは、薄桜学園理事長の近藤勇と、こんどういさみ

教頭の土方歳三ひじかたとしぞうだった。

「若人わかひとが自発的に企画を立てて実行する、いいお手本じゃないかね。このような先輩たちの姿を見れば、新入生たちもきつと学園を盛り立てていくやる気が出ることだろう。ん？ どうしたんだ、総司」
「えっ、い、いやあ、そうですよね近藤さん！ 僕、ちょっと原作を買いに行こうと思って。どんな役でも頑張りますよ」

足止めを食らった総司は、慌てて笑顔で取り繕った。

「そうか、それは楽しみだなあ！ じゃ、君たち、必要な物が有ったらなんでも言いなさい。私のポケットマネーでなんとかかしよう。気をつけて帰るんだぞ」

近藤は上機嫌で去って行く。総司は笑顔を解くと、溜息をついて席に戻った。

「おい、俺は別に義理立てなぞせんぞ。我が妻と恋人役を演じるのでなければつまらん」

「そうはいかねえよ、万年生徒会長」

残っていた土方が千景に睨みを利かせた。「お前の失点はもうこれ以上つけると即退学だ。それは困るっていうなら、学園の運営に協力するこつたな」

「教師の分際で生徒を脅す気か?!」

「土方先生、流石にそれは・・・」

他の生徒たちもざわめいたが、千景は思案したのち答えた。

「・・・では、千鶴がヒロインをやるといふのなら乗ってやる」

「うん、うん、そっだよな！ やっぱ千鶴がヒロインじゃなきゃ俺たちもやる気出ねえって」平助も頷いた。「じゃあ早速、配役決めよーぜ」

「待て」制したのは一だった。「雪村・・・それでいいのか？」

「はい、皆さんが協力してくださるんだったら、私もその役で頑張ります」

「そうか。あんたがそれで良いと言うなら、俺は何も言うまい」

「ヒロイン・ハーミアは雪村君ということで決定ですね？ それでは、残りの配役を決めていきましょう。」

山崎はそう言うのと、黒板に配役を書き始めた。周りからは全員一致の拍手が起こった。

ハーミア：雪村千鶴

満足げに立ち去ろうとする土方に、千鶴はそっと耳打ちをした。

「もしかして、先生、風間先輩に劇をやらせるためにあんな事を？」

「まあ、憎まれ役は俺の得意な役どころだ。じゃあな、頑張れよ雪村。お前の晴れ舞台、楽しみにしてるぞ」

土方は微笑んで、教室を後にした。

「では、ヒロインの相手役を決めたいと思います」

「はいはいはいはい！」平助が勢い良く手を挙げた。「俺やりたい！ ってことで決まりだよな」

「何を言う、我が妻の相手役なのだから俺に決まっているだろう」

「はー？ 俺だって幼馴染なんだからな！ ていうか、お前勝手に結婚とか決めてんじゃねえよ」

そこに参戦したのは薫だ。

「ちょっと待てよ、俺だって従兄なんだから結婚だってできる。相手役にはぴったりだろ」

「そういう問題か?!」

「では他にヒーローをやりたい人は?」

さりげなく自分も手を挙げている山崎が訊ねると、なんと天霧も手を挙げた。

「なっ、天霧! 貴様、この俺を裏切るのか?」

「いえ、しかし、こんな機会は滅多にあるものでは・・・」

「あっはっは、おもしれえな、確かに主役張れる機会なんて滅多にねえもんな。じゃあオレも立候補つと」

不知火までもが手を挙げた。

「!!!」

「ヒーロー6人でどうすんだよ、これじゃ白雪姫でもやった方がいいんじゃないかねえか」

「おい、天霧、辞退しろ」

「嫌です」

再び騒然となった教室で、千鶴はオロオロしている。

先刻からなかなか事が運ばないのにイライラしていた総司は、ついに仕方なく発言した。

「こんなにやりたい人が多いのなら、くじ引きとかにするしかないよね。ジャンケンとか」

「うむ、ジャンケンではややこしくなりそうだから、あみだくじなどが公平でいいだろう。雪村に作ってもらおう」

「そ、そうですね！ 私もそれがいいと思います」

一も助け舟を出してくれたので、千鶴は山崎と協力して、黒板に配役のついたあみだくじを書いた。

「僕のは余ったのでいいからね」

総司はそう言うと机に突っ伏した。山崎が役の説明を始める。

「ライサンダーがハーミアの恋人、そのライバルがデミトリアス、その元カノがヘレナ。この関係をかき回すのが妖精のパックと妖精王オベロン。他にオベロンの妻ティタニアとハーミアの父、それから町の領主シーシアスがいます・・・」

（大体さー。ヒロインが千鶴ちゃんなんて当たり前前すぎるんだよね
・・・）

山崎の声が、次第に子守唄となって、総司は意識が遠のいていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5461ba/>

真冬の夜の薄桜鬼

2012年1月14日23時52分発行